C 年特定16　ルカ13章22―30節

［直訳］

22 そして　彼は通って行きつつあった　町々と村々ごとに、
教えながら　そして　旅を　作りながら　エルサレムに向かって。
23 だが、言った　ある人が　彼に、
「主よ、少ないのか　救われる人々は」。
だが、彼は　言った　彼らに対して、
24 「あなたがたは戦いなさい　入るために　狭い戸口を通って、
というのは　多くの人が、　私は言う　あなたがたに、
努めるだろう　入ることを
そして　彼らは力がないだろう。
25 ときから　立ち上がる　家主が
そして　彼が閉じる　戸口を、
そして　あなたがたが始める　外に立つことを　そして　戸口を叩くことを
言いながら、「主よ、あなたは開けてください　私たちに」、
そして　答えて　彼は言うだろう　あなたがたに、
「私は知らない　あなたがたを
どこから　あなたがたはある」、
26 そのとき　あなたがたは始めるだろう　言うことを、
「私たちは食べた　あなたの前で　そして　私たちは飲んだ、
そして　私たちの広場において　あなたは教えた」。
27 そして　彼は言うだろう　言いながら　あなたがたに、
「私は知らない　［あなたがたを］
どこから　あなたがたがある。
あなたがたは離れ去りなさい　私から　すべての不正の働き手たち」。
28 そこに　あるだろう　泣くことが　そして　歯ぎしりが、
あなたがたが見るだろうときに
アブラハムとイサクとヤコブとすべての預言者を　神の国において、
だが、あなたがたを　外に投げ出されている者を。
29 そして人々が来るだろう　東と西から　そして　北と南から、
そして　彼らは座るだろう　神の国において。
30 そして　見よ　ある　最後の者たちが
ところの　あるだろう　最初の者たちで、
そして　ある　最初の者たちが、
ところの　あるだろう　最後の者たちで。

［新共同訳］

22 イエスは町や村を巡って教えながら、エルサレムへ向かって進んでおられた。23 すると、「主
よ、救われる者は少ないのでしょうか」と言う人がいた。イエスは一同に言われた。24 「狭い
戸口から入るように努めなさい。言っておくが、入ろうとしても入れない人が多いのだ。25 家
の主人が立ち上がって、戸を閉めてしまってからでは、あなたがたが外に立って戸をたたき、『御
主人様、開けてください』と言っても、『お前たちがどこの者か知らない』という答えが返って
くるだけである。26 そのとき、あなたがたは、『御一緒に食べたり飲んだりしましたし、また、
わたしたちの広場でお教えを受けたのです』と言いだすだろう。27 しかし主人は、『お前たちが
どこの者か知らない。不義を行う者ども、皆わたしから立ち去れ』と言うだろう。28 あなたが
たは、アブラハム、イサク、ヤコブやすべての預言者たちが神の国に入っているのに、自分は外
に投げ出されることになり、そこで泣きわめいて歯ぎしりする。29 そして人々は、東から西か
ら、また南から北から来て、神の国で宴会の席に着く。30 そこでは、後の人で先になる者があ
り、先の人で後になる者もある。」

①構成

ⓐ22―24節　十字架が待つエルサレムへの途上（22節）、ユダヤ人たちが興味を持っていた問題、つまり「誰が救われ、その数はどのくらいであるか」という問題がイエスに投げかけられる。24節のイエスの答えで注目されることは、現在命令形「戦いなさい」の後に未来形「努めるだろう…力がないだろう」が続くことである。未来になると、入ろうと努めても、力がなく、失敗してしまうから、今、獲得しようとすることが大事だ、と述べているのだと思われる。

ⓑ25―27節　「ときから」で始まる従属文は四行目までで、五行目以下が主文章になる。この段落では、戸口が閉められた後、締め出された者と中にいる家主との間で交わされた問答が描かれている。外に立つ者はなんとか戸を開けてもらおうとあわてるが、答えは「私はあなたがたを知らない…私から離れ去りなさい」であり、願いが拒絶されてしまう。

ⓒ28―30節　あなたがたが「外に投げ出されている者」であることを述べる28節四行目を挟んで、その前後に、「神の国」で宴会の席に「座る」者たちが描かれている。その人たちは、ユダヤ人が尊敬する先祖と東西南北から集まる異邦人である。神の国に近かった「最初の者」が後になり、遠かった「最後の者」が神の国に入ることになる。

②現在なすべきこと（22―24節）

ⓐ22節「エルサレムに向かって」。　「エルサレムに向かう決意を固められた」とある9章51節から、ルカ福音書は後半部に入る。この箇所の舞台もエルサレムへの途上である。エルサレムでの死は神の意思であるから、イエスはエルサレムへの道を「進まねばなら」ず、「エルサレム以外の所で死ぬことはありえ」ない（一三33）。それでも、「わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか」と嘆くイエスの胸にはエルサレムへの深い愛が込められている。ルカが描くエルサレムは、神の愛の対象であると同時に、その愛を踏みにじって神の子を殺す下手人でもある。

ⓑ「旅を　作りながら」。「作りながら」はポイエオー〈作る・行う〉の中動態の現在分詞。この中動態は、名詞ポレイアー〈進行・旅〉と共に、ペリフラシス（回りくどい表現）を作る。意味は、

ポレイアーの動詞形ポレウオマイと同じである。この節全体の強調点は、ヘロデの脅しがあっても（一三31―35）、エルサレムに着くまではイエスの行っている業は遮られることがないという点にある。

ⓒ23節「救われる人々」は初代教会が好んで用いる術語（使二47、1コリ一18、2コリ二15を参照）であり、神の国に入ることや永遠の命を得ることを表す。「救われる人々は少ないのか」という問いはユダヤ教でも問われていた。

ⓓ「救われる人々は少ないのか」と問われたイエスは「狭い戸口を通って入るために戦いなさい」と勧める。「戦う」と訳した動詞は、スポーツ競技者が勝利を目指して体を鍛え努力することを表す競技用語である。従って、人を押しのけて戦うというよりは、自分を鍛錬する努力を指すと言える。しかも「戦いなさい」は現在形であるから、今、必要とされる鍛錬が教えられている。

ⓔ24節「狭い戸口」。並行箇所のマタイ7章13節では「狭い門」であり、町の門が考えられている。ルカでは家の戸口であり、その家には宴会が開かれる部屋がある（29節）。イエスが通るように勧める狭い「戸口」は、神の国の入り口を表している（28節）。「戸口（シュラー）」は文字通りには「戸・門・入り口」の意味だが、転義して使われる場合は、神学的な意味合いが込められることが多い。「戸」の前に誰かが来ていると言えば、何かの時間が切迫していることを表す。人の子が「戸口」に近づくとか（マコ一三29）、裁く方が「戸」の前に立っている（ヤコ五9）と言えば、終わりの時がそこに迫っていることを表す。また「戸や門を開く」と言えば、神と人間との関わりが生じたことを表す。神は使徒の働きを通して、異邦人に信仰の「門」を開く。

ⓕ「狭い戸口を通って」入ることになるが、この狭い戸口とは、22節「エルサレムに向かって」との関連を考えれば、イエスが歩いたような十字架の道を暗示しており、入るのに苦しみや困難が伴う戸口を指しているのかもしれない。しかし、24節二行目の「というのは」によって、狭くなる理由が表されていると取ることもできる。戸口が閉じられる直前になって大勢の人が殺到する。いちどきに大勢の人が押し寄せるから、戸口が狭くなるのであって、今はまだ広いのかもしれない。今が大切な時だと知り、目覚めて全力を注ぐ者にとって、戸口は決して狭くはない。

ⓖ「多くの人が…努めるだろう」。24節の逐語訳一行目と比べると、動詞が「戦う・全力を注ぐ」から「努める」に弱められている。イエスは「救われる人々は少ないのか」という思弁的な問いに対して、直接には答えない。「多くの人は力がない＝入れない」がその答えを暗示する。イエスは、「全力を注いで入れ」と今すべきことを述べる。多くの入れない者は、今ではなく、将来に「入ろうと努める」人々である。

③戸が閉められる時（25―27節）

ⓐこの段落では、鍛錬を怠って入りそこね、戸口が閉じられたあと、「外に立って」あわてふためく人々の様子を描いている。将来を描くことによって、閉じられる前の努力の大事さが浮き彫りにされる。

ⓑ25節「家主が立ち上がり、戸口を閉じるときから…」。24節では救いに入るための警告として、戸口の狭さが述べられたが、ここでは時間的側面が指摘される。戸口の鍵を握っている家の主人が立ち上がる最後の時に遅れないようにしなければならない。締め出された人は戸を叩いて、開けるようにと迫るが、主人は「どこからあなたがたがあるか知らない」と言って拒絶する。

ⓒ外に立つ人々は面識があると訴えている。マタイの並行箇所（七 22）では「主よ、主よ、わたしたちは御名によって預言し、御名によって悪霊を追い出し、御名によって奇跡をいろいろ行ったではありませんか」とあり、明らかにキリスト者が考えられている。ルカではこの人たちは、優先的に救いにあずかれると安心していたユダヤ人のことを指していると思われる。必死になった彼らは、「あなたの前で」食事をしたこと、また「私たちの広場」で教えてくれたことを申し立てて、主人と関わったことのある人物であると主張する。しかし主人は、同じ答えを繰り返し、さらに「不正の働き手」だと断定し、離れ去るようにと命じる。

ⓓ27 節は詩編 6 編 9 節からの引用。七十人訳の「不法（アノミアー）」を意味する語をルカは「不正」に変えている。それによって「義」の欠如を強調したのかもしれない。「不正」と訳される語アディキアーは、「義を欠く」という意味である。義とは相手との関わりを大事にし、それにふさわしい態度を取ることである。しかし、「あなたの前で」食事をしたと訴え、「私たちの広場で」教えたと言っても、「義」と呼べるような誠実な関わりを欠いているなら、場所を共有しただけのことにすぎない。外に立って訴える者は主人との関係を強調するが、主人は「あなたがたを知らない」と述べ、それを否定する。

④閉められた後の外と内（28―30 節）

ⓐ戸口が閉じられた家の中では、宴が始まる。29 節の「座る」は食卓につくことを表すから、ここでは終末の宴が指されている。ルカ 12 章 37 節では、神の国での食事について「主人は帯を締めて、この僕たちを食事の席に着かせ、そばに来て給仕してくれる」と述べている。この宴の席には、アブラハム・イサク・ヤコブやすべての預言者の他に、「東と西から、そして北と南から」全世界から集まる異邦人が連なっている。しかし、「外に投げ出された者」は戸口の隙間から、それをのぞき込むことしか許されない。

ⓑ30 節の「最初の者」はユダヤ人を指し、「最後の者」は異邦人を指す。ユダヤ人は自分たちこそ救いに近いと慢心し、「今」をおろそかにし、救いから遠ざけられた。むしろ救いから遠いと考えられていた異邦人の中に救いにあずかる者が現れる。しかし、異邦人だからということだけで救いにあずかれるのではないように、ユダヤ人だという理由だけで遠ざけられるのでもない。大切なことは、「今」がどのような時かをわきまえ、それにふさわしく応答することである。

⑤今を全力で生きる

ⓐ外に立って戸口を叩く者たちは、「あなたの前で」食事をしたと主張するが、その場に居合わせただけで、家の主人と面識があったのではないのかもしれない。広場で主人が教えていたときも、ただ聞いただけで、その教えに心を打たれて行動したわけでもない。主人と向き合うという「義」を欠いていることが、救いから排除される真の理由である。

ⓑ戸口がいつ閉じられるかは誰にも分からない。しかし、イエスが語りかける「今」は、開かれている。この今を活用して終末の宴に連なるためには、神に心を開き、イエスとの交わりに入れるようにと、自分自身と「戦う」必要がある。戸を狭くしているのは、自分は救いにあずかれるという慢心である。神は誰にも戸を開いている。それを生かすかどうかは、その人自身にかかっている。